

編 集 後 記

平成 18 年豪雪から 2 年が経ちました。このときの雪の降り方について発表するとき、冒頭で「もう 2 年前になりますが…」とつい言ってしまう。長岡に来て以来、毎年冬だけは観測に加えて空を見て、Web 情報を集めて、日誌を書いて、どのような気象場でどのような雲ができ、目の前にはどのような降雪や風があるのか、全て関係づけて理解したいと思ってきました。

続けてみて驚いたことに、現れる降雪の特徴が毎年全くと言っていいほど異なっています。北信越地方について言えば、2004 寒候年 (2003/2004 冬季) は海岸線に平行な線状降雪雲が多く、2005 寒候年は北に大きく回り込んだ雪雲が中越地震被災地に集中、2006 寒候年は渦状降雪が多く、2007 寒候年は帯状雲の降水が雨になり、2008 寒候年は西から入り込む雪雲が目立ちました。これらは今のところ観測経験にすぎず、正しいとは限りません。しかし、その内容はずっと積雪地域外に住んでいた私が考えていたことと正反対と言って良いものでした。雪雲は 10 km スケールであり、寒気団や高低気圧の大きさは 1000 km スケールです。

寒気の南下は毎年異なります。しかし 2 桁もスケールの小さい雪雲の特徴は、一冬通して見れば毎年それほど変わらないように、現実を見る前には思われたのです。毎日少しでも見て記録していくことがいかに重要か、改めて認識させられました。

「雪氷」の特徴のひとつとして、研究調査、教育、機器開発、社会インフラの管理から雪形まで、積雪地域に住みながら雪氷に係わる方、あるいは海外観測などで現地の雪氷現象に触れておられる方が多く執筆、講読されているという点があります。現実を見ているからこそ気がつくこと、発言できることは多くあります。見ている人には当たり前に思われることが、見ていない人には想像もつかないということも多くあると思います。「雪氷」では論文からこぼれ話まで、さまざまな形での発表が可能です。皆様お手持ちの観測、観察、記録について、未発表のもの、再解析したものなどぜひご投稿下さい。もちろんこれらに限りません。雪と氷に関係するオリジナリティある記事をお待ちしています。

(中井専人)